

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に



CREATOR INTERVIEW ^{No} 159

田中せり Seri Tanaka

1987年茨城県生まれ。2010年武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科卒業。同年電通入社。普遍性と柔軟性を両立したデザインを軸に、企業のロゴやVI開発をはじめ、ブランドのパッケージデザイン、美術や音楽領域のグラフィックデザインに携わる。主な仕事に、日本酒せんきん、小海町高原美術館、本屋青旗、SCAI THE BATHHOUSE、AMBIENT KYOTOのロゴデザイン。森美術館「アナザーエナジー展」、DIC川村記念美術館「カラーフィールド」の宣伝美術。音楽家・蓮沼執太のアルバム「unpeople」のアートワーク、羊文学のグラフィックデザインなど。また、写真の偶発的な現象を扱ったパーソナルワークの発表も行う。2020年JAGDA新人賞、CANNES LIONS、NY ADCなど受賞。

柿木原政広 Masahiro Kakinokihara

1970年広島県生まれ。(株)ドラフトを経て、2007年に10 (テン) を設立。

主な仕事に、singingAEON、R.O.U、藤高タオルのブランディング、角川武蔵野ミュージアム、静岡市美術館、NEWoMan YOKOHAMA、信毎メディアガーデンのCIとサイン計画、また、美術館のポスターを多く手がける。カードゲーム「Rocca」をミラノサローネに2012年から出展。著作に福音館の絵本「ぼんちんぱん」「ひともじえほん」など。

2003年日本グラフィックデザイナー協会新人賞受賞。原弘賞、東京ADC賞、JAGDA賞、NYADC賞、ONESHOW PENCIL賞、GOOD DESIGN賞など受賞多数。



地域みなさんと協業する場所をつくってみる



クリエイターインタビュー

『時代と共に並走できる、長生きするデザインを』

published_2024.9.4 / photo_yoshikuni nakagawa / text_yusuke kajitani

「NEWoMan YOKOHAMA」のサイン計画をはじめ、絵本「ぼんちんぱん」のような自身のプロジェクトも行う、「10inc.」の代表・柿木原政広さん。「本屋青旗」や「AMBIENT-KYOTO」のロゴデザインなど数多くの作品を手掛ける田中せりさん。お二人ともに、アートディレクター、グラフィックデザイナーであり、グラフィックデザイナーの登竜門である「JAGDA 新人賞」を受賞しています。生まれた世代も手掛ける分野の領域も異なるお二人の、見る人の視点を変えるような新鮮なデザインの源は、一体どんなものなのでしょうか。今回はお二人にとっても縁のある「日本のグラフィックデザイン 2024」の会場を舞台に、それぞれのお仕事から見てきたデザインの“今”について語っていただきました。

二人をつないだキーパーソン。

田中せり もともと、柿さん（柿木原さん）と距離が縮まったのは“ちょも”（西川◎友美）の存在が大きいですね。

柿木原政広 そうだね。2020年にちょもがJAGDA新人賞を受賞した時、せりちゃんも佐々木俊さんも受賞した同期で、3人はそこから交流が始まったんだっけ？



西川◎友美

2018年に第19回1_WALLグラフィックでグランプリを受賞し、2020年には田中さんと同時にJAGDA新人賞を受賞。グラフィックデザインを軸にしながら「西川◎友美」としてアーティスト活動も展開。「10inc.」に所属していましたが、2021年に病気のため鬼籍に入られています。

画像:西川◎友美 作『ぞう』(2019年)

Photo by KIOKU Keizo

田中 はい、ちょもは同じ年で、ささしゅん（佐々木俊さん）も学年が同じだったので、3人ですぐ仲良くなって。ちょもはその頃「10inc.」で働いていたから、ちょもの“ボス”としてよく柿さんに会うようになりました。

柿木原 せりちゃんとお会ってから4年くらいなんだけど、ちょもを通じて会ってるから、なんだか半分身内のように感じてしまう（笑）。彼女はなんでもはっきり言ってくれるから、いい意味でかき回してくれたな。受賞した3人で展示したりもしたよね。

田中 ちょものいいかき回しのお陰で3人の独特なグルーヴが生まれたので、大切な存在なんです。新人賞を受賞してから、私がロゴデザインを担当した「本屋青旗」で2021年の3月に「3ジン」という3人展をやって。その展示を終えた後に「3年おきにまたやろう!」と話し合っていたので、今年の3月にちょもの作品を預かるかたちで、また3人での展示を実現できました。



本屋青旗 Ao-Hata Bookstore

アートブックやZINE、プロダクトを中心に「視覚文化を基軸とした本屋」として、2020年10月福岡市薬院新川沿いにオープン。書籍やプロダクトと連動した展示を積極的に行い、多くの方に気軽に立ち寄っていただける本屋を目指している。田中さんがロゴデザインを手掛けた。

画像:本屋青旗 ロゴ(2020)

田中 ちょもとの話は尽きないですね。

自分より長生きするデザインをつくる。

田中 それでいうと、柿さんは最近どんなお仕事をされてるんですか？

柿木原 目下取り組んでいるのは、国立新美術館の「田名網敬一 記憶の冒険」に関する書籍かな。もともとは PARCO MUSEUM で開催された、田名網さんと赤塚不二夫さんのコラボレーションの作品集を担当した縁があって。今は国立新美術館で販売される大型本に加えて、ほかの冊子も3冊担当しています。



田名網敬一画集『TANAAMI!!! AKATSUKA!!! / That's All Right!!』

集英社マンガアートヘリテージより2023年1月に刊行された、田名網敬一と赤塚不二夫作品のコラボレーション作品集。東京アートディレクターズクラブの原弘賞、JAGDA賞2024のひとつにも選出された。

画像：田名網敬一画集『TANAAMI!!! AKATSUKA!!! / That's All Right!!』(2023年／集英社)

田中 合計4冊！ そここまで本をつくれる作品点数があることもすごいですね。

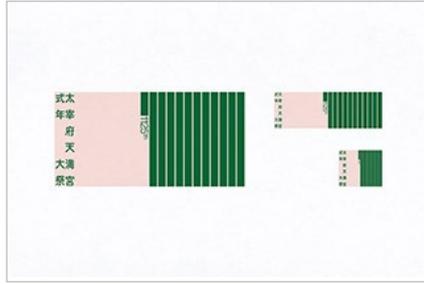
柿木原 あとは「FUJITAKA TOWEL」やログハウスブランドの「BESS」などのブランディングを長く続けていますね。せりちゃんのお仕事はいつも魅力的だなと思って見てるんですけど、最近は何のものがありませんか？

田中 福岡に菅原道真公が祀られた「太宰府天満宮」という神社があって。2027年に1125年式年大祭という25年に一度の大祭があり、そのロゴデザインを2年前から手掛けています。2027年に実施される催しなので、まだ世の中にあまり表立って出ているものは少なく、長期プロジェクトとして関わっていく仕事が増えているなと思います。



太宰府天満宮

福岡県太宰府市宰府にある神社。菅原道真公を御祭神(天神さま)として祀っており、令和9年(2027)に天神さまが太宰府の地で薨去(こうきょ)されてから1125年という節目にあたる「菅原道真公1125年 太宰府天満宮式年大祭」を控えている。令和5年(2023)から124年ぶりの重要文化財「御本殿」の大改修を行っており、改修に要する約3年間の天神さまのお住まいとしての「仮殿」の設計を、現代を代表する建築家・藤本壮介氏率いる藤本壮介建築設計事務所が担当している。



太宰府天満宮式年大祭ロゴ

令和9年(2027)に控えている「菅原道真公1125年 太宰府天満宮式年大祭」のロゴデザインを田中さんが手掛けた。1125年という長い年月を振り返ると同時に、次の1125年先を想像する機会が訪れるよう、右半分は11本と4分の1のライン、左半分は余白で構成されたビジュアルアイデンティティになっている。

画像:太宰府天満宮1125年式年大祭 ロゴ(2022)

柿木原 つくっているのは 2022 年だけど大々的に公開されるのは 2027 年となると、デザインに配慮するところも変わってくるよね。

田中 そうですね……。長期的に考えて、古びないものをつくらないといけないので、私は「普遍性と斬新さ」を半分半分でイメージしながら、「数年後の自分が見てもワクワクできるか」自問自答するような仕事が増えはじめてるように思います。

日本酒酒造の「せんきん」さんからお仕事のご相談を受けた時、「100年後に残るロゴをつくってほしい」とリクエストを受けたんです。大きなプレッシャーを感じるのと同時に、自分より長生きするものをつくりだす、というテーマはあまり考えたことがなくてすごく面白いなと思って。普段はだいたい半年から1年くらい先の納品物をつくっていることが多くて、もちろんそういうクイックなデザインの面白さは感じる一方で、つくってはすぐに流れていってしまう虚しさもどこかに感じていて……。息の長い仕事にも携わってみたいと思いますね。



「せんきん」

「仙界に棲む『鶴』」の頭をモチーフに赤・白・黒の3つの色で構成された、田中さんのデザインによる、栃木県の酒蔵「仙禽(せんきん)」のシンボルマーク。蔵の名前・銘柄名である『仙禽』は創業から代々蔵に受け継がれている名前。

画像:日本酒 せんきん ロゴ(2019)



田中せり アートディレクター / グラフィックデザイナー
SERI TANAKA / Art Director / Graphic Designer



柿木原政広 グラフィックデザイナー
MASAHIRO KAKINOKIHARA / Graphic Designer

published_2024.9.4 / photo_yoshikuni nakagawa / text_yusuke kajitani

デザインの「手前」にある関係性。

田中 柿さんもすごく長く携わられているクライアントの方が多いですね。

柿木原 立ち上げから一緒に始めて、そこから継続して並走していくことは多いね。そうするとどんどん、提案というよりフェアに話し合う打ち合わせに近くなってきて、クライアントというよりパートナーに近くなっていくというか。もちろん、だからといって提案の斬新さや魅力を落とすことはあってはいけない。だけど、その手前の関係性を築いていくことが大事なんじゃないかとは思います。

田中 私が大学生の頃、柿さんデザインの幼稚園の卒園証書を ADC 年鑑で見て印象に残っていたのですが、今でも毎年卒園式に行っているんですね？

柿木原 富士中央幼稚園ですね。CI（コーポレートアイデンティティ）の依頼と合わせて卒園証書をつくって、園長さんが卒園式に呼んでくれるので今も毎年一言だけ喋っています。最初のほうは、自分の子どもが幼稚園に通っていた頃だったので、子どもにおくる言葉としてコメントも考えやすかったんですけど、年々子どもと幼稚園生の年齢が離れていって 今は子どもの幼稚園時代を思い出しながらコメントしてます（笑）。



富士中央幼稚園

柿木原さん率いる「10inc.」がデザインを手がける、静岡の富士市にある『富士中央幼稚園』の卒園証書。「"発想の自由さを大切にしたい"という小林園長の言葉をヒントにした、クマのような形だけどトラになったりカエルになったり、とらえ方によって変化するロゴ」をそのまま証書のデザインに。

画像:『富士中央幼稚園 卒園証書』(2002年)

田中 柿さんの話もまさにそうですが、我々だけじゃなくてクライアントの方々も、いわゆる発注・受注みたいなドライなコミュニケーションじゃなくて、もっとパートナーとして言葉をお互いあえるような関係性を望んでいることが増えましたよね。

柿木原 競合プレゼンみたいな仕事を得るための提案って“ライバルに勝つための提案”に終始してしまうところがあって、結局クライアントの解決したいところにまで届かないことが多いから、そういうズレに双方が気づきはじめてたのかもね。

もっとシンプルに言えば「お互い気持ちよくやりとりできたほうがいいし、フラットに意見しあえる方が結果的にいいじゃん!」って双方に思いはじめたというか。それはデザインに限らず、どんどんフラットにしたほうがいいという世の中の動きの影響も大きいと思う。

文法をつくって委ねてみる。

田中 すこし抽象的な話かもしれないのですが、私は作品をつくる時、自分の想像していなかった現象が起きることにすごく興奮するんです。「エラーだけど、すごく美しい!」「こういう使い方もあるのか!」と自分がコントロールできる範囲で完成させずに、機械のプログラムに委ねてみたり、協働する人のアイデアでより広がっていくような瞬間が刺激的だなと思って。

柿木原 せりちゃんが感じているように、ロゴはなるべく自由度が高い方が魅力的に感じるというのは時代のムードとしてもあるよね。特にロゴのようなCI計画は、昭和末期頃から細かなマニュアルを作ることもセットで流行っていたと思う。雑多なものを整える意味で重要視されたんだよね。でも今はそういう考え方が定着してきた結果、しっかりルールを決めると逆に足かせになってしまうことが多いもんね。

田中 まさにそうです! 「AMBIENT KYOTO」のロゴを担当した時、禁止事項をまとめたロゴマニュアルじゃなくて、ロゴのポテンシャルを引き出すために映像のロゴマニュアルをつくったんです。アンビエントミュージックのイベントなので、明快な始まりと終わりがなく、環境の影響を受けて、常に変化し続けるアイデンティティとは と考えて、私が意匠として手を加える部分は最小限に、“ルール”だけをデザインしました。そうすることで自分の意図しないユニークなコンポジションと出会うことができる。書体もベーシックなHelveticaにして、アイデンティティは“空間”を象徴する平行四辺形だけ。背景透過のロゴなので置かれる場所によってロゴに背景が溶け込んでくるんですけど、それほど自由に使い倒されても残るアイデンティティこそ価値があるのでは、という私なりの実験でした。



AMBIENT KYOTO ロゴ(2023)

置かれる空間や環境に応じて変化する「平行四辺形」と「背景に同化するタイポグラフィ」からなるロゴ。田中さんによる「アンビエント」の解釈＝考え方をそのままロゴの「マニュアル」とした仕掛けがユニーク。

柿木原 CIは確認する人が多い分、どんどんルールが複雑で細かいものになっていくことが多いけど、そうじゃなくて、使われ方を含めて「委ねる」ことで新しい価値をつくっていかう、というのは重要な提案ですね。

六本木のアートの顔。

柿木原 六本木といえば、僕は自分が関わっていた東京ミッドタウンの「Salone in Roppongi」の思い出が色濃いですね。「Salone in Roppongi」はプロデューサーの笹生八穂子さんと一緒に、ミラノサローネ期間中にミラノで紹介されている日本人のクリエイターをあらためて日本に向けて紹介するプロジェクト。10年くらい継続して開催していたので、イベントの設営の大変さや、ミッドタウンのどこの駐車場が近いとか、そんなことばかり思い出してしまいます（笑）。



Salone in Roppongi

世界中のデザイナーが集まり期間中は街中が熱気に包まれる世界最大級の国際家具見本市「ミラノサローネ (Salone del Mobile)」。その息づかいを伝えるべく2013年にスタートしたのが、「Salone in Roppongi」。年に一度、世界を舞台に活躍するクリエイターらの作品を六本木から発信。Salone in Roppongiのロゴ、会場グラフィック、タブロイド等制作を柿木原さんが手掛けた。2019年には柿木原さんがクリエイターとしてモビールの展示を行った。

画像:『Salone in Roppongi』(2013年~2016年)



田中せり アートディレクター / グラフィックデザイナー

SERI TANAKA / Art Director / Graphic Designer



柿木原政広 グラフィックデザイナー

MASAHIRO KAKINOKIHARA / Graphic Designer

published_2024.9.4 / photo_yoshikuni nakagawa / text_yusuke kajitani

田中 デザインもそうですが、ピラミデだったり、森美術館だったり、ギャラリーが集結しているアートの街としての印象もありますよね。休日はギャラリーに行くことが多いので、六本木は馴染み深い場所でもあります。

柿木原 僕もそう思ってたんだけど、今日この会場に来るために乃木坂を通ってきたら、乃木坂沿いに味のある民家が意外と多くて。こういう場所も六本木の一部なんだよな、とあらためて感じていました。

田中 そういった、いち地域として六本木を考えていくとまた違った可能性が見えてきそうですよね。

クリエイターが街に関わるプロジェクトでいうと、私にとってすごく印象に残っているものがあった。イギリスの建築家集団 ASSEMBLE がリヴァプールで実施した「Granby Workshop」という廃墟の再生を目的にしたプロジェクトなんですけど、建築家が真新しいものをつくっていくのではなく、そこにあった廃材をつかって、近隣の住民と一緒にワークショップをしながらつくっていくんです。つくることが特別扱いされていないことも魅力に感じますし、既にある資産を活かして作り変えていくかたちは素敵だなと思いました。ああいった、活動のデザインをいつかしてみたいな ...。

柿木原 プロフェッショナルの集まりじゃないからこそ、それぞれの得意なことを活かして音楽をつくったり、ご飯をつくったり、そういう偶然が積み重なって全体が生まれていくプロジェクトはいいですね。

一緒に作業するという“活動”。

田中 柿さん、「富士山の麓でDIYしている」って聞いたんですけど。

柿木原 そうそう。でも、私宅ではなく「10inc.」の福利厚生施設にするつもりでつくっています。古い建物をスタッフと協働でリノベーションしはじめて、もうかれこれ8年くらいになるかな？冬の間は雪が積もっていて行けないので、春から秋くらいまで月に一度くらいのペースで作業していて。完成しなくてもいいと思ってのんですよね。というのも、フィジカルを伴う労働がいいなと思って。「無心で塗る」とか「ひたすら削る」とか（笑）。そういう作業をスタッフと続けている状態がひとつの活動になっていて、とても気に入ってます。



「10inc.」の山小屋

富士山の麓にある10inc.の山小屋。柿木原さんが月に一度程度のペースで「作業」に出かけていき、DIYに興味がある人たちの手によって現在進行形でリノベーション中。

画像：山小屋の作業風景

田中 審査会で一緒に出張していた時も、アンティーク家具屋に寄って「この家具、部屋のあそこにもいいかも」と言っていましたもんね。

柿木原 実際に素材や空間を手で触れてつくっていく体験をすると、ものの見え方が変わるのも面白いんです。建売住宅を買って使うのとは、自由度も全然違うし学べる量も違うから、画一的ではない自分たちのプロダクトをつくっていく楽しさがすごくある。六本木でも、街中の住民の方々に声をかけて、せりちゃんが話してくれたプロジェクトのような協働型の場所が生まれたりすると面白いよね。



田中せり アートディレクター / グラフィックデザイナー

SERI TANAKA / Art Director / Graphic Designer



柿木原政広 グラフィックデザイナー

MASAHIRO KAKINOKIHARA / Graphic Designer

published_2024.9.4 / photo_ yoshikuni nakagawa / text_yusuke kajitani

ローカルの魅力はディテールに。

柿木原 街や地域の話だと、今、熊本県の南の方にある人吉・球磨地域というエリアに関わっているんですけど、不思議な体験をしたんです。訪ねた時に泊まった宿がわりかし古い宿で。「昨日の夜中、上の階の子どもがうるさかったね〜」なんてスタッフと話していたら、その場にいた人が「それ座敷わらしですよ」ってさらっと教えてくれて（笑）。たしかに泊まってるのは僕たちだけだったんですよ。



人吉・球磨地域

人吉・球磨（ひとよし・くま）は宮崎県と鹿児島県に隣接した、緑豊かで山深い南九州の中央部に囲まれた人吉盆地に位置する地域。盆地の形状が三日月形（三日月盆地）になっている。鎌倉時代から明治維新まで700年以上にわたり相良家により統治され、風水の思想から「気を溜め込みやすい」といわれる盆地の周りに結界をつくるように城下町の設計がされ、その中心部である三日月城に気を集中させる意図で街づくりがされていた。

田中 え、嘘!

柿木原 そのエリアがまた面白くて。街全体が風水に基づいてつくられているんです。人吉城を中心にして鬼門には神社を置いて、と、今僕たちが住んでいる街とは違うルールでつくられている。しかもそれが大々的に銘打たれているわけでもなく、当然のように暮らしの中にあるので、まるで日本の原風景に触れているような気持ちになります。

田中 ローカルな面白さって住んでみないとなかなか見えないですけど、どの地域にも面白さがありますよね。

私が住んでいる品川の近辺は下町の雰囲気があって、家の隣がお年を召した方々が集まるカラオケスナックなんです。その店がコロナ禍をきっかけに窓全開でカラオケするようになって、ずっと演歌が聴こえてて(笑)。もちろんその声は近隣にも聞こえているはずなんですけど、ずっと音量が変わらないので、周囲もそれを特に気に留めてないんです。「今日も元気で何より」と私も平和な気持ちになるし。東京は騒音に厳しいイメージが強いかもしれませんが、もしかしたら本来の東京にはこういう寛容さもあったのかな、と思えるので大好きです。

柿木原 目掛けて探せるものじゃないから、そうやって出会うのは面白いよね。

「10inc.」の山小屋をリノベーションしていくこともそうですが、僕は最近「菌類」のようになれたらいいなと思っていて。上も下もなく、横のつながりという菌糸でコミュニティが形成されていて、ただそこにあるだけでじわじわと成長を続けていくような状態っていうのかな。それが成長して、ひとつの大きなきのこをつくったり(笑)。

面白いものに興味を示して、そこへ首を突っ込んでいくようなやり方は今後も変わらないと思うんだけど、一方で僕はもう 54 歳になるので。もっと自分個人で目指すものに時間を使っていけないといけないなと思っています。絵本のような制作だけでなく、教育の分野にも力を入れていきたいですね。



柿木原さんの絵本『ぼんちんぱん』

柿木原さんが初めてつくった絵本。主役は食パン。「ぼんぱんしょくぱんぼんちんぱん」とリズムカルな言葉とともにパンの顔がかわっていく様子が子どもたちにも人気を集めました。

画像:『ぼんちんぱん』(2014年/福音館書店)

柿木原 せりちゃんは今後、どうしていきいたいとか考えたりしますか？

田中 そうですね……。私は、柿さんの絵本やカードゲームのようにプロダクトとして販売できるパーソナルワークはまだ出来ていないんです。正直に言えば、展示企画も知人から機会をもらってようやく作るという受け身状態というか。具体的なコトではなくモチベーションの話なのですが、変わらずスタディとしての実験的なパーソナルワークは重ねていきたいと思っています。自分の中で気になっているテーマや表現にチャレンジして、そのプロセスをアウトプットすることでフィードバックを得て、それが誰かとのコミッションワークの成果物に還元していった、それがまた次のパーソナルワークの種になるような。自分の中の小さな原動力の循環を維持することができたらいいかな。

撮影場所：東京ミッドタウン・デザインハブ

*対談中に登場する田名網敬一さん是对談収録後の 2024 年8月9日、くも膜下出血のため 88 歳で逝去されました。謹んでご冥福をお祈りします。

取材を終えて……

お二人とも手掛ける仕事こそ違うものの、そこで感受している時代の雰囲気やクライアントとの関係性の築き方については共通したお話を伺えました。クオリティの高い成果物を仕上げるというゴールだけではなく、一緒に仕事をするクライアントやパートナー、ひいては市井の人々と“協働”することでともに作りあげていくプロセスにまで目を向ける。コントロールできない領域を恐れるのではなく、そこで起こるズレも含めて楽しんでいくというお二人の姿勢は、街づくり、コミュニティづくりなど様々な分野にも通じる、明るいメッセージとしても受け取れました。(text_yusuke kajitani)